

奇異性脳塞栓症

奇異性脳塞栓症は、下肢などにできる深部静脈血栓症(DVT)、即ち静脈内で発生した血栓が、静脈を移動して最終的に脳動脈に到達して発症する脳梗塞のことをいいます。DVTはエコノミークラス症候群で知られており、長時間同じ姿勢でいる時、静脈内の血流が低下して、血が固まりやすくなり、血栓が生じることがあります。それは飛行機だけではなく、他の乗り物や会議や映画館でも生じるともいわれています。通常、DVTは静脈内を移動し、心臓を経て、肺動脈を介して肺に到達するため、肺塞栓症を発症します。しかし、その血栓が頸動脈を介して脳動脈に到達して、脳梗塞を引き起こすことがあります。それは、シャント（短絡路）疾患を合併するときに見られ、その疾患には卵円孔開存（図1）、肺動静脈瘻（図2）、心房中隔欠損、心室中隔欠損などが挙げられます。奇異性脳塞栓症の診断には右左シャント疾患とDVTの検出が必要であり、当院では適宜その検索を行っています。

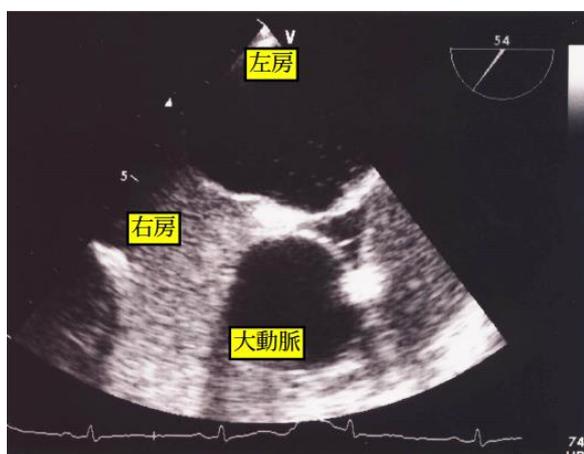


図1

図1：経食道心エコー検査を用いてマイクロバブルテストによる右左シャントの検出を行い、卵円孔開存の有無を調べています。一般的に、卵円孔開存は4～5人に1人にみられるといわれています。右房に描出されるマイクロバブルの一部が左房に移動して描出されており、右左シャント、即ち卵円孔開存が存在していることを意味しています。通常左房圧の方が右房圧よりも高いため、右房から左房に卵円孔を介して血液が移動することは少ないです。しかし、立ち上がる時や排便などの時に、息止めをして肺の圧力を高めた結果、右房圧が上昇し左房圧を超えると、同現象が生じることがあります。

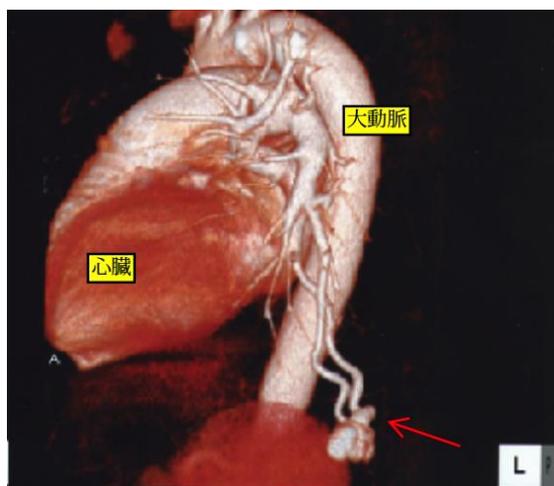


図2

図2：造影CTを用いて肺動静脈瘻の診断。矢印部分が肺動静脈瘻の所見です。